

Inches

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black



貞操婦人、賢徳六編 下

2913
20
13



へ13
2913
20
梓

昭和九年
七月六日
購

貞操婦女八賢誌六編下

村田

京都

為永春水編次



第卅九回

涙を躲して老女義譚を聴く
笠を深して於道良医を索ぬ

案下老女の發熱とておそる
旅道の顔をお守り
小膝を我りそんり貴女が娘等の有るに恩を受く
言入典膳さぬのお娘みお道さぬめて在せし此程か理
喜が澤らふの委し
作しお家の大復父君さぬおも
報せぬ其の心を念を晴さんと心公辱しの崖略を園ふ

女八賢四輯の六

胸のこゝ塞ぐりて氣で此身の年若く及たむかざるも
お助力のつとめ人のつとめて老の身の又詮術もあらずを
せめて娘を此世に命を捨てて嫁さるゝお道の山本望を遂
まのつとめよ余のつとめは管願家よりつとめくゝ頼きよるゝ
死なむと本意の物とすゝ死ねよ死ねよと罵るゝも言聞せ
てはさすゝされど其期あらずびて徳をせぬゝ奈はつと
今日まむも夫のつとめをみくらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
昨日金澤の洲崎のつとめ管願さるゝのつとめを礼物をせ
ひ女あり妻しゝ時中あつねども乙女の身ゆゑ太儀な

氣まがはし者もあつるものよと一いひ言へば又二いとまふは
遠野辺のつとめあけはつとめ備やまゝと罵るゝ物もきつりあ
釘の獨りかを痛め一折るゝ思ひがけどもお二個さるゝおおの
再びお披露見はつとめお髪をのれとつとめいひ衣裳はまゝ左方右
方と血のまゝもつとめいひもつとめお得む者へ港のつとめ遠くを昨日
洲崎のつとめおつとめ山本望を遂らるゝ娘二個がお供はつとめ
老母が言活を及古お世で疎殺せり余のつとめくゝて敵を怖て
逃まゝつとめあつる昨日の始末はつとめあつるつとめつとめ
言つとてお道のつとめあつるつとめつとめつとめつとめつとめつとめ

ひあつて 出づる 今更 終の 勅辭を 説き
示し 斯くも 危き 瀬戸の 大厄錦の 内儀の 奇蹟も 既に
今の 是れら ごとく 不思議 其場を 道に 一六 四個の 者
之 淺海を 負ひ さま 散らるる ほど 何れ 那 脱獄ハ
ちと ありし 俺 們と 落さんと 辨らる 敵と 辨とも せむ 難し
歎 息 ありし ぞ 丹を 赦ふ べき 術も なく 討死 せし 歎 息
今更 何れも 忘へ ざり 情を なく 恐る 是れ と言ふ 事
老女 といふ 猶 轉く 胸を おし ちた 涙 吞ひ ち ち 會
はし 諸人 二女が 命を 替へ 貴女 ごとく 後ろ 安く 暮

まから せん といふ せし ぞ 娘 まで と 老 婆が 顔 美
記 きたりし もの 我り や 涙 せぬ 嬉し ひと どの 言ふ こと
め 北方の 娘 二個が 二個 卑世を 残り 老の
身 命を 今より 後の 命に せん 命を 浮世 といふ
隣の 娘 や 思ふ 公を 色も 出さ ぬ 涙を 笑顔 みに
胸の 肉を 苦し けし 二個の 老女 の 哀 勝を 推量 せし
便 めて 竊る 袖を 濡せ ば 頓て お梅ハ 小 膝を 打ち 思ふ
場と 和女 の 義一 男 娘の 命を 捨 させて も 忠義を 立 げ
懐し といふ 昔の 有 難き 親 公 涙 一滴と 不 なる 泣 け 場

義母の恩重き公見へて最痛まし一命をも得ぬハ
遠くねまを多塚のありし和女が奈分さまば遠浦辺る
海士が家申と問ひくけらまを命ふとよま疑念の理多
日か老波が草屋へ貴女がとを縣居し更迷くもか縣
岡えけん脱み討隊の對ひしを漸くするて破抜の些の由
縁のありをの七此家小須更身を寄せし彼か縣の大六
舊悪竟の顯ひきて擲て逃放せしま一は老波が身ハ
恙なく今更も安全の日を送る中も貴女がこの更娘の
心の擲ぬ目もつりしお思ひ寄るむもお二個さぬお回會

たる老のよろこび又ゆるりう是のそんと酌話のうち片辺るの
燗裏の茶を折焚くゆゆ茶港のつまみ込む山菜も時の
答えたる顔て棚より取しを揺らぬみ答ふ山お安ん
よみ盛りまる麦の冷飯そのつらみ些の鮮臭取添て二
個さあし指やうくおゆめ命へま物もさねど御肌を凌る
身と言ひまをよるこぶ二賢女の辭のまきりさるねど會
親を方く箸を取るふ飢の膳しおさるるまば味さる飯も
時として六美味極儀ゆも孤増て暑心地狂亂し箸を納む
尚も膳凌ぬるぶいよままの目もさるりつら暮て曠昏の瘡

りて幽々遠山未だ燈火の影を照しける登時老女の身を託し左辺
右辺の戸関をしりぬ燈火の影を照しける登時老女の身を託し左辺
三度り昨日の残りひの影や芳きて在るんぬ長潭りの云
蓋さるん一室に外房ものべさるれば心静くあはれひ
此家の主人の紙六とて老女うらぬの擧ぐるまき
校めてかたきといひき者もまきとまき今朝より細くあはれ
上達の浦のりりくく速くて四又の陣のまき
此家の老女が外坊ひある人もあはれまき海士が伏家のひ
せきごふ厭ひをいひおはるるべの時まきも此家のひびて時

節を候ふへと最老實も老女が言爲の二個のよまき
慮どを頼て外房の入りける其夜四更の頃よりとお梅が
疾海痛む出し身うち俄の発熱しと心絶死ぬべと思ふぞ
お道なきより老女まき言覺て種々と心絶を聞かぬ
ども薬の影へまきもまき遠辺の浦のまき馬ん
思の医師まき近き田辺のまき二個の殿と當分の首
を密て居るりお道の信とまき時まき考へ居るり
まきまきかきくお梅まき本後まきまき思ふ
昨日野馬より終日軟じてまき一ひ疾疾の波風吹入て



ろくをまごころ
 老婆赤心を
 ひつぢよ
 二賢女の
 味くま



破腸風やぶちやうふうはかりとるるらん 倘破腸風やぶちやうふうをらんあは吾儕われらが家いえの
先祖せんぞより傳つたへりし名法なほりの妙まこと美うつくしかりりるる開ひらき求もとめんる
最難さいなんし其その甚し法はふと奈な何なにとるる子この年としの延えん生せいのあてまも田たか
情なさけ念ねんをうる女子むすめの乳ちちの下したの血ちを赤あかくを取とりて其その痲まを洗せんひ
奈な何なにとるる破腸風やぶちやうふうなりとも本ほん後ごせむと云いふるるしと亡なし
爺おやさぬのお落おちつて睡すいみ所ところを居ゐるもの此こゝ妙まこと美うつくしを求もとめんる一ひと
個ひとの處女むすめを言いせねば多おほくは清きよくつるるよと云いふるるも
義ぎのたつり況まじて我われの疾やまを負おかへし一ひとお梅おむねさんの一ひと命いのち代かへる
此こゝ身みの惜おぼしきねど子この年としをねばまも治なるる一ひと美うつくしきもの
須臾しゆゑんの間まお淋しみしくとも常とこ守まもり候まをりてお梅おむねさぬの妙まこと美うつくし風ふう邪じゃ
でもりぬやう心こゝろにつけて進すすむよと云いふとお道みちの听きひを
まゐるに猶なほ吾儕われらが性しやうん奈な何なにとるる老おいの身みの服ふく令しやう健けん多おほ
まも吾儕われらが望のぞみよも及およばぬと云いふと和わ女により常とこ守まもり
四鄰しよりんの人の訪とみ来きしとき吾儕われら一個ひとが遠とほ所ところの居ゐるまより
怪あやしきを身みめうけて吾儕われらをりり病やま客きやくの身みの福ふくひのたふ
おまへと云いふるる常とこ守まもり居ゐる者ものと和わ女によが来きたよと云いふるる
醫師いしと傳つたへりし小女こむすめの吾儕われらの他ほか舎しやへて我われを
候まをりよと云いふるる四鄰しよりんを見みまへしと云いふるる掛かへる義ぎを其その
文賢ぶんけん四輯しよくわいの六む

一軒の農家ありて先年産種の多のとき首領の夏
ひりし由を祈の名医といふハ王子村に居りしとき今ハ
とふ居りしや四存知るるバお入てよと問へば首領を傾け
たつりて五稔むり跡み言つて如き怪我人ひりしがその
時憑きし名医といふハ基謙倉の医師めて今頃医術
修行のむ折よく王子の居る里にゆき招きて療治と云ふ
あが今ハ鎌倉へ戻ら且しその後のむハおどと云ふいふぞ
お道ハ勿地力も抜け思ふと思ひし綱も切是是と云ふ
とらもろく此村の末に松子と云ふね敏の品皮へま降り又

よき思按もろくばふ聖なるもおぼぬ病人と家み残して左
右辺と死益の方と社廻り可憐一日を費せし日我も
最鈍まきしと先此うあハ一笠たりと明らきうち
戻らんものとお頻りふ其燥ハ流石大気の乙女されども
思ひの外ハ道端迷ひ本郷村へとむべきと東の野道へ
か入てとや黄昏もる頃日暮の里み出しバお道ハ
ゆりし公急げども今朝の地りつげふ身うち暑れ
のこもむと頻りふ咽の乾くむぞおまの家のゆも
一晩の湯を貰はんと思まらむと向ふ白屋のむら

片辺の短刀をもちて杖をふるお社の目先へ突かす情
 意ぶとい和女の根生御よりと替品と替りても口説
 ても兼引せざらん是那がうのいふ花のほろも急の意地
 二稔誠しめ喰潰さまごさ手援念ふ此刀でさうう殺覚
 せよこそ先るぞよ吹るぞよこんる痛の目あやうさう恋とさ
 言や真さぬと言はまて榮離ハ自堂自在のうさう標と
 念んとしそ可憐命と殺さんより思ひ直しを應と言や
 是でも否くと寄り添へばお袖の口惜く腹立しく実放
 さんゆも女子の甲斐するさ念きとも肌身ハ汚しと思ふ
 心の一筋の標くらまらるるをと標拂ひ涙みおもうるませと
 情の有女太郎さるま稔の秋より今月まても恨の女と
 言ひるま主あつ身あて液間し悲しむ愛と思ひし今更
 此身を慰殺めさまらとて立し標ハ破らまごびるめさう人
 堪忍しとて言はせもひらむ冷笑のゆぞと言はば標と听
 夜も月の真女立和女の標とさるる気でもま稔の七月の晴ま
 夜小園塚山の標めて氣絶りさう其おれ和女の肌を我
 肌で暖めもし抱ますしとまごまのさう片辺の短刀を
 びるびるまてはうはへ後しとて妹脊背への毒も湧りて

深き二人の情合今更肌身は任せぬと言ふ事とて詮ま
更斯くも標を直抜く、奈何とて同語くは神の
お族く胸をさしりて形容を正しきんかお茶ハたご
うと私を實の妻のせんと長月の月日を此家の任切ら
苗並て馬鹿言ハせぬ柄はよるまと知らて六指の
低令命ハさうくとも筆う肌身で汚さんと言ひら、神を
旅切つて逃んとするを逃さすと逃ひぬ事人きとらう、奈
何やあけん有女太常が右もみ持する短刀はてお神が乳の
下八九寸水もさすくを判貫きと窮所の除痰の煩累

得ては竹と真びて作るほど有女太郎も作天一色ハ
乃積ぶぬと思んどもとや疵物みせしう多奈何とも詮
梅まーと思ふべの腹まーく苦むお神を踏くしと
下ぬまを踏付くこ苦しうせらるぬう我の腕を強面
頼ひく則ち斯のどし初うあううふゆもも冥土の去る
言ひゆらせんう程和女が家一の通り玄捻より我家の
常並一人敷して公の順らせ思ひの終る廢んで倦と時分
在女の侍て黄金のせんぬのと思ひの外ぬ自強の女一筋索
下ゆきまると時節を候ふ量らざるも和女が養家の神宮屋ハ

大賢四舞の六



暗夜の
再會
六道
姉妹
いづる

おそで

知縣の乃不礼物さきまは家内の以們も残さず
死絶しを所て悲しむ和女の極み時かひよと縁てよう憑
並一左四郎と依不花勝とらうて那梅太郎八首飲と
和女を熱く欺く親父別是男は捨て身一身の寄辺なく
忽地我ふるびくんと勘まを尽しをも小胸の悪い標を
是でも貞女がまよふ梅太郎が可危いと踏みどらまを
いと猶深痰のうゑふ阿素は絶んとしう息の下より於
種六細きまを立儲六抱術と思ひも私を欺えん倘使して
那梅さんが浪花を地一女子を妻とま一此身を捨て

たうふ持てよす呪のお道とや尾腰お袂くと喚び生れ
僅ふ細き目をひらき。マ懐く一の呪さんと意いさなをりて
舌とらり物さきまの四苦九苦お道へ命をと思ふをさ
く心洞うち挿ひ去程の暖湯汲とてはあつくませこれ
窮行るまども浅疾より苦痛を忍びて今呪が未だ不
一言と心を静めてよく所よまろ七月の量らざむ園塚山
めで面會嬉しと思ふ間もや和女ハ津谷之熱ひ落开せ
救はんやも大りの脱身行時も速く鎌倉へと思へハ氣強く
空場を去り絆の絆を弄賣ふして筒後ふま欺き一ふ

誓の運や宜うりけん 鈍くも定正と討洩せしめ又量らざる
 過世よりほき縁ある四賢女と義を結びたる全情ゆへまこと
 如此くの変わりありし余もまた和女の意慕ふ良友とのりも実の
 女子賢女の一名でありしと今もわづらひつゝんと言はせ
 たらと旅くのも同返をせま力もろく最知ろく氣の情向を
 お道へあらうと抱起し候令女子でありしとも良友とおりの
 此候ふ命を捨てても破らんと立抜く様を和人が所へは程極
 うらん孤くしとの思ひもると言ひらうお神が願ひをつくら
 見げのゆへん心も浮む事やありけんお友の心も
 女が命を殺せしめ思ひまらうく地もろくも自ら夫の存し
 お梅さんの病氣を瘥せ大妙薬とのりも身も遠入てや
 苦痛のうらみ目を視のりも松が死んどがらぬぬえぬ
 お方のお名も人と同じ返さすて余もよ嚮ゆも酌話と
 瀬戸の大尾お梅さんの病氣を瘥せ大妙薬とのりも身も遠入てや
 のりも元と乳其此身ゆぬぬえぬ本後させよと送りき路
 次と王子まで医師を索ねし甲斐もろく空しく遠行まで
 帰り来て量らざる遭し瘡負の和女乳の下添く破れれ
 じて廻ひ合する家傳の名流子の年の延生にてあるも男の

交ぬ處女の乳の下の血とを弁取り七十五病の病時ハ
忽地活せよといふ言なりと竹て六居とどろくハ得が言
茶と思ひ候しハ和女ハ私ハ一才下應仁二年の誕生にて
乃ハ成子の身と思ひ當りハ不幸の俸ハ和女の血ハやで
郡人の女後よりハ此身の面を乾きものより和女も亦ハ貞
操を血ハ不ハ頭ハ心ハの潔白又此言ハのるハと云ハ
まてお袖ハ焼ハ氣ハ苦ハ息の下よりハ頸ハ血ハ不ハ
取り七言ハ言ハ入ハお道ハ領ハの義ハ義ハ人の為ハを
在勝の血を取りハと云ハ心ハと直ハ一時運ハ運ハ六淫ハと
片辺ハひり合ハ茶壺ハ是幸ハと云ハ明ハ明ハお袖ハ血ハ
當ハ運ハと云ハと云ハと云ハ血ハ不ハ四辺ハ深ハと云ハ壺ハ残ハ
糸の絡ハ初ハ糸ハ糸ハ他ハと云ハと云ハと云ハと云ハ
お道ハ女ハと云ハ取りハ納ハ南无阿弥陀佛と唱ハと云ハ
手傳ハ不ハ死ハ息ハ終ハけりお道ハ覺ハ期ハのうハ
今更ハの候ハ覺ハへて血ハ筋ハ切ハと云ハと云ハの涙ハ須ハ更ハ
けりハ勤ハてハ不ハ思ハと云ハと云ハと云ハと云ハと云ハ
堀埋ハりハ僅ハ小ハの石ハを建ハと云ハと云ハの回ハ向ハ一室ハ
立戻リ洞ハと云ハ不ハ彼壺ハを携ハへと云ハと云ハと云ハ
後ハと云ハ

毒虫左四郎物とも言ふを破付る刃の光るる身を搦り
 速く刀を扱取りて汝もううふ雄言の隻別を婿が
 冥云の供せよと言ひり丁と破つる刃の涙は左四郎が
 首へ透るる飛去りて軀は流るる仆らを見向も中を又と
 投捨徐々として出ゆけり必竟お道が血を推乃へ三皮へ
 帰るふゆりて後甚麼なる奇談りある開編を智巻を
 改め勇五輯のくもる鮮あるを所ねる



東都作者 柳北軒主人春水編

貞操婦女八賢誌

